

阪神大震災

みぞれ混じりの小雨が車のフロントガラスに当たる。

「このまま降り続くのだろうか」そんなことを考えながら車を走らせる。午前五時十六分須磨浦公園駐車場着。雨は止んでいた。しかしあまりの眠さに車の中で五分程寝る。

九十五年一月十七日

忘れもしないあの日のことである。

本来なら前日の十六日(月)に行く予定であった六甲全山縦走は店の行事遠足クラブの「チャレンジ千が峰」と日程が重なりやむなく十七日(火)に変更した。

やむなくと言うのは火曜日は店(当時は定休日)は月曜日であった)があるので六甲縦走をしている場合ではないのだがこの六甲縦走にはちよつと訳があったのだ。

それは一月三日を第一回目とし、六甲全山縦走を十週連続行うことであった。

これはこの年の四月にある第十回サハラマラソン大会に出るために自分に課した参加条件であった。

つまりオレの場合このくらいトレーニングをしなければ「あの過酷なサハラマラソンに出

る資格なんかない」と自分に言い聞かせていたからであった。

車の中で五分ほど寝る。午前五時二十五分サハラマラソン出場のことを考え気合を入れマグライトを片手に縦走開始である。

「この縦走トレーニングも今回で三週目だ。がんばろう。」

六甲全山縦走に関してはこの度の縦走とは別に過去幾度となく行ってきた。

だがいつも眠たい目をこすりながら早朝にここに来て出発するまでがとても気分的につらいものである。

「夜が明けぬ暗いうちからなんでこんなことをするのか・・・」といつも思ってしまう。そう思うのもつかの間、歩き出すとだんだんと眠気もとれてくる。

そうなると気分は一転して「早起きは三文の得」などと元気が出てくる。

第一週目(一月三日)からそうであるが写真を撮りながら縦走ということで一眼レフカメラとバカチョンカメラのふたつをザックに入れている。

どうしても縦走タイムを気にすると「いい？写真も撮れない」ということで今回は縦走へースを落とすことにした。

速い時だと須磨浦駐車場から旗振山茶屋まで十三分程だが今回は十七分、午前五時四十二分着。

当然のことながらまだあたりは真っ暗だ。でも旗振山茶屋にはいつものようにもう誰かが来ている。

このへんは早朝登山で近くの年配者が毎日登って来ているようである。

はつきりとは覚えていなかったがいつもなら月明かりを頼りにするのだがこの日はマグライトをずーっと使っていたので月は出ていなかったように思う。

旗振山茶屋を過ぎるとゆるやかな下り坂になる。

この当たりは野良猫が多く、時々その目がマグライトに照らされて光る。

その光には縦走当初ドキッとしたものだった。そんな林の中をゆっくり走る。

鉄拐山を左に折れてすぐのことだ。左前方に青光を感じたと同時に走ってる体が左右に何度か振られた。

始めは頭がフラフラするのかと思っただがちよつと違う。

何度か振られた後、転倒しそうになり縦走路脇に生えている木につかまろうとした時揺れが止まった。

およそ十秒くらいの揺れだったように思える。

今いるこの場所は平静を取り戻している。

しかし今まで経験したことのない異常な揺れ、音だったのでとても嫌な予感がした。

午前五時四十七分（正確には四六分らしいが）すぐ時計を見るのは六甲縦走の時の習慣である。木につかまらかけたが時間を確認後すぐ走り出す。

「オレは縦走中だ！」と同時に「この地震で神戸の町から火が出る。それをカメラに・・・」と少し走る。ペースを上げて見通しのきくところまで急ぐ。

須磨アルプスに午前六時二十分着。

案の定、長田区から炎が上がっている。まだ夜は明けていない。静まりかえっているはずの神戸の町から炎が出ている。

須磨浦駐車場からずーっと聞いていたラジオからは地震の情報を時折伝えているがそれは現実の数パーセントにも満たない。

結局高取山まで行き、いっこうに消え止まぬ、いやどンドン燃え広がる神戸の街を目のあたりにして引き返せざるを得なかった。



しかし、事の重大さに気が付いたのはロールアウトの店(明石市魚住町)に戻りテレビのスイッチを入れた時であった。

テレビで見た壮絶なサハラマラソン

九十四年十一月下旬にたまたま見ていたテレビで「人生観が変わる！」と言うメッセージ付きのサハラマラソンのゴールシーンに目が釘付けになっていた。

すぐその気になってしまうオレはサハラマラソン参加要項をすぐ取り寄せる。

過去のサハラマラソンのビデオテープそしてその他それらに関する資料に目を通す。

それは「世界一過酷！」と名付けられる通り壮絶なサハラ砂漠で練り広げられるちっぽけな人間達の大きなドラマであった。

もう出場を拒む理由はどこにもない。しかし把



どこまでも続く砂漠の中でドラマが練り広げられる・・・

握していけば行く程不安と興味が入り交じる。

「果たしてオレにできるだろうか・・・いや、そんなことより出る(出場)価値は十分にある。」

九十五年一月一日

この年も青垣町にある岩屋山で初日の出を向かえその足で氷ノ山を登る。

今年の正月は十人程のメンバーで氷ノ山に登り山頂で一泊したがあれからもう一年が経ってしまったのかとといういろと蘇って来る。

氷ノ山は想い出多き場所である。慣れないテレマークスキーで左肩を脱臼してしまったのも昨年だ。

こんなこともあった。途中までスキー場のリフトを利用して山頂を目指すのだがそのリフトにうまく座れず五十リットルザックとテレマークスキー板を抱えたまま田んぼに落ちたこともあった。

本来ならオレのケガの心配をすべきリフトの係員にも笑われてしまった。

そんな想いにふけていたのも束の間、東尾根を過ぎたあたりから腰まで埋もれる雪が行く手をふさぐ。

今年は四人とメンバー少なかったがそのメンバーで変わる変わるラッセルをするが思ったより時間をとられ更に昨夜の大雪と遅い出発がたたってか、まわりがだんだん暗くなり始める。

その時ふとサハラマラソンのことが頭をよぎった。

「サハラ砂漠・氷ノ山(雪原)・・・暑いか寒いか・・・砂か雪か・・・。砂漠もここもそう違いはあるまい！」

今回は山頂を断念し中腹にある神大ヒュッテまで戻りここで一夜を過ごすことにする。

「氷ノ山はまた今度来て山頂へ行くことはできるがサハラマラソンはそう何回も参加はできない。

出るからには自分で納得の行くゴールを駆け抜きたい。・・・やれるだけのことはやろう！」

一月三日(火)

「やれるだけのことはやろう！」氷ノ山で心に決めた六甲全山縦走トレーニングの第一週目の日である。

須磨浦駐車場を午前六時四十分出発。

十分程登ったところにある展望台で日の出を待つ。

紀伊半島(海からではない)から登る朝陽を一眼レフに収めるためだ。

一月三日とはいえオレにしてみれば今年初めての縦走。

ここから見る朝陽は初日の出も同じ気分である。

気温二度の寒空の中四十分程カメラを構える。

雲が邪魔をしてくつきりと太陽は見えなかったが日の出直前の朝焼けをなんとかカメラに収めることができた。

十一時三十五分摩耶山着。めずらしく売店でうどんを食べる。宝塚駅に午後二時二七分着。

帰路は阪急宝塚線で西ノ宮北口までそしてJRに乗り換える。

めずらしくこの日は三ノ宮で下車して三ノ宮高架下の店をぶらつく。

一月一七日(火)

一月三日・一月九日そして今日の十七日と三週連続の縦走である。

「三日坊主にならぬようがんばろう。」そう自分に言い聞かせ小雨の中、須磨浦駐車場に車を走らせる。

鉄拐山を過ぎたところで地震に遭遇後もまだその事の重大さを知らず、高取山に着いたのは午前七時二十五分。

とても寒い、温度計を見るとなんと三度、旗振山では六度だったのでそれから更に下がっ

ているようだ。

この神社境内の石像などはあちこちに散乱しており空はどんよりとした灰色一色で燃え盛る炎の煙りがその灰色の空と一体化してとても不気味だ。

「とりあえず火が消えないうちに写真を撮ろう・・・」そう思いながら三脚をセットする。寒さと目の前の光景に身を震わせながらシャッターを切る。

ラジオの数少ない情報も手伝ってかオレはまだ宝塚駅まで縦走するつもりでいた。

しかし消えて行くはずの目の前の神戸の炎は衰えるどころか更にその勢いを増し、炎の数がだんだん増えて行く。

二十分位カメラを覗いていたが「もしかしたら世の中はたいへんな事になっているので六



甲縦走をしている場合ではなかも・・・」そう思うと急に家と店(ロールアウト)のある明石の方が気になりだした。

すぐ今来た縦走路を逆戻りする。来る時は暗くて気付かなかった須磨アルプスの縦走路はえぐり取られて大きな岩があちこちに崩れおちていた。

六甲縦走からパンク修理に変更

年頭に決めた六甲縦走は三回目で中止せざるをえなかった。

物理的(帰路の時に利用する電車が不通)にももちろんの事ではあるが心情的にもそんな事をしていく状況ではなくなってしまうたのである。

でもサハラマラソン出場の事を考えると「十週連続六甲縦走」をあきらめきれず、いろいろと思索した。

というのも十週連続六甲縦走がサハラマラソンに参加できる条件・・・と自分で決めていたので、それがどんな理由であれ途中で止めてしまうと云う事はサハラマラソンに参加しても「完走すらできないのではないか」と頭を悩ませる。

そんな時、たまたまロールアウトに来ていたお客さんの言った言葉が「オレが今すべき事を教えてくれたのである。それは被災地でのパンク修理である。」

「一月二十三日・被災地で無料自転車パンク修理に行く・ロールアウト午前六時集合」の張り紙をロールアウト店内に。

一月二十三日(月)

まだ陽も明けぬ午前六時、ロールアウトの店の前には大山、森田、佐々木、能島、そしてオレの五人が集まった。

マウンテンバイクにパンク修理道具を詰め込んで神戸市長田区まで行く。

「しかし、果たしてパンク修理などあるのだろうか・冷やかして来たと思われないうか・復興作業の邪魔にならないだろうか・」そんなことを思いながら荒れ果てた街中を縫う様にペダルをこぐ。

というのも実は震災三日目におにぎりや飲み水を五十リットルザックにいっぱい詰め込んで被災地に行ったのだったが「もっと困っている人にかけて！」と、行くところ行くところまで断られた辛い思いをしたばかりだったこともあり今回のパンク修理もちょっと勇気が必要としたのである。

でもそんなことばかり考えていても仕方がない。とりあえず一歩行動に移さなければ・・・

しかし実際はそんな心配をよそにパンク修理は大好評で長蛇の列を作り夜まで途切れる

ことはなかった。

「役に立った！被災地に向いて良かった！」この日のために会社をズル休み(笑)した能島も他のメンバーも皆安堵感に満ちていた。

余談になるがオイラは自転車店屋をしているのにパンク修理が一番嫌いな作業であった。しかし今回の件で「自転車店をやって良かった！このパンク修理が困っている人の役にたった！」と痛感したのであった。

とりあえず二日後の一月二五日と二七日(八時～十二時)とをパンク修理の日とする。

ロールアウト(自転車店)の開店はそのあとだ。

店の仕事も大事であるがそれよりも今オレにはすることがある。

「被災地でのパンク修理これは神様が私に与えてくれた任務だ！」そう思い込む単純な性格。

「でもサハラマラソンのトレーニングはどうしよう・・・」大震災の被害はとても大きく世間が混乱している中、たとえジョキングをするにしても抵抗を感じてしまう。

いろいろ考えた末、ロールアウトの店からパンク修理をする長田区までランニングで行くことに決めた。

これなら被災者に少しでも役に立てて更にトレーニングにもなる。

我ながら Good idea である。舗装路を走るのは好きではないがパンク修理を兼ねたトレーニングと思うと気合が入ってくる。

一月三十(月)

午前三時四十分起床。とても眠い。でも蓮池小学校で教室に寝ている被災者の事を思い浮かべるとそんな眠気はあつという間に吹っ飛んでしまう。

午前四時十分店を出発。気温は一度と低く寒いがお風呂に入り暖かいふとんをかぶって寝る事のできる人間がそんなことを言ってる場合ではない。

が、いくら走り続けても体はいっこうに暖まらず逆に汗が冷えて一年前の氷ノ山での脱臼した左肩が痛い。

午前六時五六分蓮池小学校着。仲間と待ち合わせた八時よりも一時間も早く着いてしまった。

しかし寒空の下にもかかわらずここでの時の流れというのは全く長さを感じさせない。

ここ蓮池小学校で生活している人、道行く人そして押しつぶされたビル、道、橋、車と目に入る全てのが今までの平和すぎた生活とはとても似つかないかけ離れたものだ。

今日で四回目になるがまだまだパンク修理に訪れる被災者は多く午後六時頃までその列は続いた。

一日でなんと1百四十八台(八人のメンバーで)ものパンク修理となった。帰路もランニングで帰る。がさすがに疲れた。

二月二日(木)

午前四時二十分起床。ちよつと眠いが熱いお茶とご飯を胃袋に詰め込み出発する。パンク修理の道具を背負つての蓮池小学校までの距離はサハラマラソンのトレーニングに丁度良さそうである。

なんとここ蓮池小学校ノボランテアから被災者用のパンと牛乳をいただく。強く断つたのだが「たくさんあるので・・・」とのこと。小学校校門前で道行く通勤者ら



しき人達にも配っているのととりあえずその好意にあまえる。

しかしそのパンが配り終わった頃小さい女の子の手を引いた母親らしき女性が「この辺でパンと牛乳を配っているの聞いたのですが・・・」と困った様子で私に尋ねて来た。

つかさず先程戴いたパンと牛乳を渡したがこんな時「必要としている人に提供する」ことの難しさを実感した。

二月九日(木)

震災後の六甲縦走路(須磨アルプス近辺)がどうなっているか少し気になり今日は縦走路経由で蓮池小学校にパンク修理に出かける。

魚住を午前三時二十三分に出発。以下は次

の通りである。

明石ダイエー前を四時二十分、須磨浦駐車を五時三十四分、旗振山五時五十一分、須磨アルプス六時三十六分着、ここで二十分程写真を撮る。妙法寺七時十五分、蓮池小学校七時四十分着。

震災当日と同じように旗振山を過ぎたあたりから小走りでハイキング道に行く。鉄拐山を左に折れる。

時計を見ると午前五時五七分、震災当日に比べちょうど十分遅い時間である。

青光と共に体が揺れた場所であち止まる。

震災当日の出来事が昨日のように思い出される。

更に進み須磨アルプスに近づくにつれて地割れが崩れがひどくなり、立ち入り禁止のカーンバンが目につく。

そして須磨アルプスを見るに無残な姿と変貌していた。

「たとえどんなに修復しても神戸の街並み同様この縦走路も完全な元の状態には戻らないだろう」

そんなことを思いながら荒れ果てた足場に気使い先を急いだ。

二月二七日(月)



蓮池小学校でのパンク修理。貴重な経験になった・・・

このところ走り過ぎのせいか足が少し痛いため今日は電車でパンク修理に行く。
ここ蓮池小学校でのパンク修理も日を追うごとに少なくなってきたおり、今日は十二件だけだった。
昼過ぎロールアウトに戻ると我々がパンク修理をしている蓮池小学校から歩いて五分もかからないところの自転車店が営業再開したとの情報が入ってくる。
急遽蓮池小学校でのパンク修理は本日をもって中止と決める。
翌日、蓮池小学校に告知していた「毎週月曜、木曜、無料パンク修理」の張り紙を剥がしに出かける。そして同じ場所に「。自転車店営業再開」の張り紙を張る。

神戸をあとに

三月二十五日(土)

いよいよサハラマラソンの出発まであと数日となった。
サハラマラソンの申し込みをした当時はその出場がとても待ちどろしかったがこの大震災の影響もありこの四ヶ月間はあつという間に過ぎてしまった。

トレーニングのやり過ぎか少し足首を痛めてしまっているので出発まで少し休養をとることにする。

しかしこの四ヶ月を振り返ってみると自分としては「よくもこんなにがんばれたもんだな」と驚いてしまう。

苦手な早起き、寒さの中での神戸までのランニング、どこにそんなパワーがあったのか。それは被災地でのパンク修理を通じて被災者から直接魅せられた「全てを受け入れて明るく強く、一生懸命生きよう」としている姿」のお陰のような気がする。

そんな被災者を目の当たりにしていると自分の立場がとても贅沢に感じ少々辛い事なら乗り越えられそうなそんな強い気持ちにさせてくれるのであった。

しかしこの大震災がなかったらオレは当初の十週連続六甲全山縦走をやりとげることができたであろうか。少し疑問である。
気を抜くつもりはないがこのサハラマラソン大会まであと数日となったが「もう半分はサハラ砂漠を走った。いやこのサハラマラソン出場の半分の目的は達成した」と言っても過言ではないだろう。そう思えるこの四ヶ月間であった。

どんなことでもそうだが一つの事を成し遂げようとするとき心に決めてからそれに対する準備、つまり資料集めなどから金銭面、休暇の工面そして周りの理解などそして今回の様であればそれなりの体力作りなどと実際のスタートラインに並ぶまでにいろいろなこと

が必要となってくる。
ただ単にお金だけを払い全てを他人まかせにしてスタートラインに並べるわけではないのである。
つまり「何をしたか」ではなく「どうやってしたか」というようにその過程がとても大事であり意義のある事と私はいつも思っている。

三月三十日(木)

いよいよアフリカへの出発の日だ。午前四時五分起床。

眠い目をこすりながら震災のパンク修理の事を思い出す。

今日と同じような時間に起きて出かけた事を。

もう震災とサハラマラソンとは切っても切

れない関係になってしまっている。

そしてその時と同じように熱い日本茶と大好きな納豆ご飯で朝食を済ませ出かける。
JR魚住駅を五時二十九分の電車に乗る。神戸に近づくにつれて電車の窓からは高取山が見えてくる。

震災当日火の手の上がったばかりの神戸の街を見下ろしていた山がそれだ。

その後幾度となく通ったこの街神戸。電車で揺られながら見るそれらの光景はこれからサハラに旅立つ私にいろいろと語りかけるのであった。

夢にまで見たサハラマラソン

三月三十日(木)

いよいよアフリカ・モロッコへの出発の日が来た。

と言っても集合場所はパリのオルリー空港のためひとまずフランスに入国である。
機内ではワインを飲みながら「地球の歩き方・モロッコ編」を読んでいる。

なぜかわからないがあつたサハラマラソンに出ることよりもその後旅するアラブの国モロッコに興味がいってしまっている。

このためにあんなにトレーニングを重ねて来たはずなのに気持ちは旅人と化している。



約十二時間のフライトを終えパリのシャルルドゴール空港に着く。

ご存知の方も多いと思うがこのパリには二つの国際空港がありその詳細は次の通りである。まず一つは市の北側約二十五 Km に位置するここシャルルドゴール空港(ロワッシー空港とも呼ばれている)で、その中にはターミナルが二つあり「ド・ゴール1」と呼ばれるターミナルにはエールフランスを除くほとんどの航空会社の便がここに着く。

一方「ド・ゴール2」はエールフランスの専用ターミナルで国内便もここから発着。それぞれのふたつのターミナルは1Km程の間に隔離されているため歩いての移動は不可能である。

そしてもう一つは市の南約15kmにあるオルリー空港である。

ド・ゴール空港ができるまではここがフランスの表玄関だった。

この空港にも国際専用の南ターミナルと国内専用の西ターミナルとがありド・ゴール同様歩いてのターミナル移動は不可能だ。

こう記してしまうと複雑なふたつの空港と

も思えるが標識がしっかりしているのでそう心配の必要はない。

四月一日(土)

午前五時起床 ホテルを後にオルリー空港へと向かう。

といっても空港近くのホテル泊だったため 送迎バスで十分程で空港入りだ。

この空港が今回のサハラマラソン大会参加者の集合場所である。

日本人参加者ともここで初めて顔を合わす。

その彼らのほとんどは成田空港からツアー(大会申し込み事務局では出国から帰国までの全ての面倒を見るバックツアーを用意でフランス入りしたようだ。

パリ・オルリー発午前九時四十分。三時間三十分のフライトでモロッコのワルザザートに到着。

そして更に二百六十 Km 程先のムシシという村までバスで移動となる。

その途中ドラーア渓谷を通るのだがその雄大な景色を見る余裕もなく我々を乗せたバスはスリリングな山道を全開で走りぬけるのだった。

ガードレールなど無い崖っぷちを覗くと何百メートルも下の谷底にはトラック、乗用車などが当然のように粉々に壊れ散らばっているではないか・・・

そんなバスに四時間程ゆられ午後五時過ぎやつのことでサハラマラソンのスタート地点となるムシシに到着。

すでに我々参加者の寝泊りするテントが二十張り程用意されていた。

「ここからスタートして毎日こういう場所でキャンプをし七日後のゴールを目指す」と思うと胸がわくわくして、いてもいられなくなってくるのだった。

その寝泊りするテントは特に割り当てがあるわけではなく各自適当に入るのだがやはり日本人は団体行動が好きなのか、ほとんどの人が同じテントに陣取っていた。

モロッコまで来てあえて日本人と同行するのに抵抗を感じるオレはイギリス、フランス人のいるテントに入り込む。

我々参加者が利用するテントというのは普段キャンプなどで使うような囲いのあるものではなく「タープ」の様なもの。これはここ現地の遊牧民が使っているもの

で風通しが良く涼しいものだが時折吹く風で砂まみれになるのが欠点でもある。

ここでサハラマラソンの競技内容を説明するとコンパスそしてへびにかまれた時の毒を吸い出すスネークポンプ、ナイフ、ランプ、電池、非常用発煙筒、消毒液、風邪薬、シユラフなど大会が指定するもの他に一週間の食料及び寝袋等の生活用品を背負いサハラ砂漠を一週間約二百三十kmを走破するサバイバル？レース。

唯一主催者が供給する水は各ステージのスタート前そして10〜15kmおきにあるチェックポイントで行われ又ゴール後に供給される4〜5リットルの水は翌日のスタートまでの分となる。

その参加者の持ち物(衣、食、住)検査とミーティングで四月二日はのんびり過ごす。

四月三日(月)

午前五時四十分起床。ほとんどの人がだいぶ前から起きていたらしく物音で目が覚めた。いよいよ今日から自給自足の七日間のサハラマラソンの始まりだ。

その手始めは朝飯の用意。まずは湯を沸かすための枯れ木、枯れ草拾いをする。大半の参加者が固形燃料を用意して来ているがオレは軽量化を重視、持って来なかった。



モロッコのワルザザート空港・手前右にいるのは田中正人氏

そのため食事前には必ず燃料になる枯れ木集めが日課となる。

この砂漠に生えている木といってもそんなに大きなものではなく五十 cm 前後のものがほとんどでそれも枯れ木はたくさんあるわけでもないので探すのにとっても時間がかかるのである。

これ又探しだした石を釜戸代わりにコッヘルでご飯の用意をする。

そうこうしているうちにテントの回収作業が始まる。

このテント回収は大会のために雇われた現地の人達が行う仕事のようにだ。

四十歳くらいのボスを中心に十二歳と言っていた子供を含めた6~7人が回収した二十個以



彼らの手によってテントは改修されこのトラックで次の場所へと運ばれる

上ものテントをトラックに積み移動する。

その日その日のゴール地点つまりキャンプ地にテントを設営する彼らの作業はとても早い。

今日の朝食だけ二食分食べようと予定していたがこれから先どれくらい体力が消耗するのか又どのくらいお腹がすくのか全く検討もつかないのでこのうちの二食は予備食に回すことにする。

その朝食のドライフーズ(乾燥食品)はいつものようにおいしく食べられ体の調子もとても良さそうだ。

ところでサハラマラソン参加者について私は日本を発つまでは「私を除いて体力はもちろんキャンプ生活など全てにおいて達人の集団？」のように解釈していたところがあった。がこの二日間参加者を見る限りオレとあまり変わらない、そんな感じがした。

いよいよ夢にまで見たあのサハラマラソンのスタートだ。
午前九時十五分二百四人が一斉に走り出す。

果てしない砂漠の彼方を目で追い、カンカンに照り付ける太陽を肌で感じ夢中で走る。ここに来るためいろいろ事を自分なりに努力してきたこと、そしてその夢が今叶っていると思うと心の底からジーンと込み上げて来るものがあつた。

そしてまだスタートしたばかりなのに「サハラ砂漠を走っている」という満足感にどっぷりと浸かってしまっているオレだった。

第一日目の走る距離は25kmだ。10kmと17.5kmの二個所にチェックポイントがありそこで水の補給がある。

うれしさのあまりかオーバーペースで走ってしまい20km過ぎくらいから足がつりだしその後はゴールまで走れず歩くこととなってしまった。

まだ一日目なのにこんなに筋肉を痛めてしまいとても心配である。

それとこんなに足がつるくらいかなり速く走ったのに今日の順位は百三位と思ったより悪くこの先が少し心配でもあった。

四月四日(火)

午前五時三十分起床。昨夜は九時過ぎに寝たので睡眠は十分、疲れはないが足のつった箇所の筋肉がパンパンに張っている。

こんな状態でこれから先まともに走れるだろうか。今日走ったら又すぐにつりそうだがでも心配はよそう。なんでもどんなことにするにしても完璧な状態なんてありえない

「人生山あり谷あり」のように七日間の間にはこれから先もいろいろなハプニングがあるだろう。

それがこの大会だ。それを乗り越えてこそゴールがあるのだ。

オレだけではなく皆それぞれにトラブルはあるはずだ。

「せっかく遠く海を越えて来たのだからいろんな想い出を持って帰ろう！」そう思うと足の不安もどこかへ行ってしまった。

今日は昨日より3km長い28km先にゴールが待っている。速く走りたいがとにかく足に負担をかけないようにペースを落としゆっくり走る。

かえってこのペースが良かったのか七十三位と昨日よりも順位は良かった。

四月五日(水)

今日は36.5kmの長丁場だ。一日目の足の痛みは残っているが体の疲れは全くと言っていいほどなく絶好調である。

昨日からそうだったが総合順位を四グループに分けて遅いグループからスタートさせている。

オレは三グループ目でスタートだ。

スタート後はまず砂と小石の混ざったコースを丘と丘の間を狙って走る。

その丘を目の前にしたあたりから車の走る道と合流、水のない川の横を道は続くのだがよく見るとその道はジグザグに大きく回り込んでいる。

どうもチェックポイントはその先にあるようだ。全員川沿いの道を走っている中、オレは川を横切り荒れ果てている岩盤を上がり下りしながらチェックポイントまでの一直線のルートをとる。

足腰に少し負担はかかるものかなりの距離、時間が短縮されたはずだ。

ここだけではなくこの大会中、オレは幾度となく近道と思われる自分だけのコースを走った。

足先ばかり見て走っているとコースがク

ネクネ曲がっているのがわかりにくいと遠くそして回りの景色を見ながら走るとルートとが見えてくるものだ。

そして自分だけのルートというものも優越感に浸れるものだ。

今日のコースは素晴らしい。

岩山あり砂丘あり水無し川ありそして小さな村を通り抜け果てしなく続く砂漠。

四十度もの暑さも湿気が無いせいかわとんど気にならない。

すごく幸せな気分浸っている。

というのも毎日昼過ぎにその日のキャンプ地にゴール、あとは翌朝までの時間をゆっくりと自分のペースで過ごすだけ。

適度な疲れ具合。お腹がすいたら食事をして眠たくなったら昼寝をする。

心地良い風の通るテントの下で果てしなく続く砂漠をなにも考えず眺めている……

これほどの贅沢はあるだろうか……

ここには都会のざわめきもわずらわしい人との付き合いもない。

あるのはここまで来た仲間と果てしなく続く砂漠だけ。暗くなったら寝て明るくなったら起きる。

少しオーバーな表現かも知れないが人間のいや動物の原点に戻ったような自然の中の生活。

ゆっくりと時が流れ心が落ち着く。



今日の結果は四十五位で三日間の総合順位も六十五位と上がってきた。というより他の連中のペースが落ちてきた、といった感じである。そして大半の参加者は足にマメを作り、中には膝を痛めている者も少なくない。そういった人達のために医療チームが毎日のゴール地点でテントを構えている。

「月の砂漠」を口ずさみながら

四月六日（木）

今日はこの大会でもっとも長い80kmのステージだ。但し制限時間は三十五時間と明日まで二日間たっぷり与えられている。大きなトラブルが無ければ歩いてでも十分完走できる時間である。

スタートから四時間三十分後、午後二時三十分過ぎ不覚にも持ち合わせの水を使い切ってしまう。

今まで地図も見ず勘（昨日までは距離が短かったため自分の確認できる範囲に誰か参加者がいた）をたよりに走っていたのだがここに来て次のチェックポイントまでの距離がつかぬず4~5km 手前で水を飲み干してしまったのである。

一時間毎に補給することになっていた食料も余分にはなく暑さも手伝ってか完全にガス欠（エネルギー不足）状態になってしまっていた。かげろうの向こうにあるチェックポイントは白くかすんで見える。何度その幻のチェックポイントを見ただろうか。

やっこのことでその錯覚から逃れることができ現実のチェックポイントにたどり着く。そこには何人もの参加者がテントの中で腰を下ろし休憩していた。

私はここで支給された水をガブ飲みし頭からも水をかける。そしてカロリーメイトとドライフルーツを胃袋に詰め込む。と腹の底から血管の中をエネルギーが音をたてて体のすみずみまで伝わって行くのが感じられる。



枯れ木を集め火を起し食事の用意をする。楽しくしかたなかった。

すっかり元気になった私はここで休むこともなく先を急いだ。

水分不足でペースが落ちた分を取り戻そうと少しペースを上げて走るがコースを見失い遠回りをしてしまった。

幸いにもコースマーシャル(主催者が参加者をチェックするため常時走り回っている)の四バギーに出会うことができ無事第五チェックポイントにたどりつく着く。

ここまで来ると二〇〇人以上もの参加者がバラバラに散らばってしまうためオレの前後には誰ひとりいない。

数キロ先にも数キロ後にも地平線以外誰も何も見えない。その地平線に今太陽が沈もうと
している。

「サハラ砂漠にたったひとり・・・」そんな余韻に浸っているのも束の間、又コースを見失いかける。

仕方無しにザックからコース図を取り出し最終の第六チェックポイントと思われる方向に足を進める。

そのチェックポイントの白色テントは小高い丘にあった。

午後六時三十分くらいだったと思う。到着と同時に夕陽は地平線に沈んだ。

夕陽に染まった地平線をバックにボトルの水を飲む。「なんてロマンチックなんだろう

う・・・」こうなると自分だけの世界に入り込んでしまうオレ。

地平線を焦がす夕焼けも、走る度にこの足に食い込むこのサハラ砂漠もオレのもの。

オレだけのためにある・・・

とすっかり自分の世界に入ってしまったオレは更にペースを上げる。

夕焼けと入れ替わりに今度は星空、月が私の心をなごましてくれる。

しかしその明かりは私の足元を照らしてくれる程の明るさはない。

100mおきにある蛍光色の発光体がコースマーカーとなり暗闇の道を形どる。

といってもその光はとても弱く近づくかかないと確認できないため勘をたよりに暗闇を走る。

星の輝きは日本で見るのと同じく変わりはないがその数の多さは比較にならない位だ。

その中にうっすらと月が出ている。♪月の砂漠を♪といつの間にか大声で歌うオレはこの

歌の通りの光景にすっかり浸っていた。

陽が沈んでからは気温もかなり下がってきたようだが走っているので寒さを感じない。

その「月の砂漠」を二時間位楽しんだらうか、やっとのことで暗闇の向こうにゴール地点の明かりが見えてきた。

昨日までは明るいうちにゴールしていたのだがこうやって夜に砂漠のど真ん中でゴール

の明かりに迎えられるというのはなんとも言えぬ心地良いものであった。

今日は80kmを十時間三十八分の二十九位でゴール(時間からして実際の距離はもっと短いと思う)今日まで四日間の総合順位も四十位と少し上がった。

ゴール後いつものようにウォーターボトルを三本受け取り、主催者の用意してあるテントに向かう。

午後八時四十分、この時点でゴールしている者は二十人ほどそして夜ということもありテントはいつものような賑わいはない。そんな中さっそく晩飯の支度をして使い切ったエネルギーの補充をする。

四月七日(金)



砂漠も夕陽も地平線もオレひとりのもの・・・

午前六時過ぎ朝陽で目が覚める。さわやかな朝だ。

しかし昨日からの80kmステージは今日いまだに続いている。すでにゴールしている者は休養日となるのだが、まだこのゴール地点にたどりつかずに砂漠を歩き続けている者もたくさんいる。

我々がのんびりとテントの中でくつろいでいる今も一人又一人と一昼夜かけてのゴールを迎えている。

「複雑な人間社会から隔離されたこのサハラ砂漠での生活」・・・こんな贅沢をいつまでも味わう事は無理とわかっているがあと二日間で終わってしまうと思うととても寂しい気持ちにもなってくる。

四月八日(土)

第五ステージは大きな丘を二つ程越えるフルマラソンと丁度同じ距離42kmのルートだ。まずは小さい丘の間を縫うように走って行く先頭集団を遥か先に目で追う。前にも述べたようにオレはその丘を駆け登り最短距離にコースをとる。

近道ではあるが疲れが溜まってきたこともあり結果的にはさほど差は縮まらないようだ。それより人と違うルート、人と違う景色を味わえると思うとついついこういった場所を走

りたくなってしまうのである（山に行くとなりに
入りたくなる？のと似た感覚だ）

スタートして20km地点にある第二チェック
ポイントまで少しペースを押さえて走る。
ペースアップは第三チェックポイントからと
予定を立てていたが暑さのため逆にペースダ
ウンしてしまう。

おまけにゴール手前5km位のところでボトル
を落とし水をこぼしてしまう。

今日は今までより少し気合を入れて走ったせ
いか足にマメを作ってしまった。

十分自分で対処できるマメではあったが一
度でいいから医療テント内でフランス人のナ
ースの手当てを受けてみたかったのだ(笑)
一部のトップランナー以外、足の治療のためお
世話になるこの医療テント。
しかしゴール時間が遅くなると治療者の数は

増え2〜3時間も待たされることになるようだ。

四月九日（日）いよいよ最終日の朝を迎える。ここまで来ると膝、足を痛めてしまい足
引きずってる人、走れない人がやたら目につく。

彼らにとっては今日の18kmと一番短い最終ステージもとてもつらい距離に感じるこ
ろう。

そんな彼らの横を私は全力でゴールを目指して走った。
どこにそんな力が残っているのか自分でも不思議なくらいだがとにかく体は好調を維持
ていた。

一時間一九分の二十位でゴール、総合順位も三十七位であった。

モロッコの旅

七日間のマラソンを走り終えた訳だが正直なところ当初自分の頭の中に描いていた「感
のゴール。人生感が変わるゴール」とやらには出会えなかったような気がする。
だが得るものはあった。「自分を信じる事。自分に自信を持って走る切る事。」

第一日目ペースがつかめず無理をして足を痛めてしまった時この言葉が心に大きなゆとり



三脚で自分撮り。当時はカメラ持参の参加者も珍しかった。

を与えてくれた。
でもこの「自信」という言葉は今まで目標に向かつて一生懸命努力してきた結果生まれたもの。

前にも述べたがこの参加を決めた時からすでにサハラマラソンは始まっていたのだ。それと「過酷」とまで言われていたサハラマラソンをこんなにも楽しくゴールできる事ができたのは参加者の誰よりもこの大自然のサハラ砂漠、サハラマラソン大会に十分溶け込めたお陰だと思う。

自分を見失うことなく自分のペースで一週間たのしく過ごせた。
ゴール後は主催者の用意したバスでザゴラという村まで移動そしてこのホテルでパーティーが行われたのだ。
しかし不思議なのは何もない砂漠のド真中



砂漠にドーンと構えるホテル。最終日ここでパーティーが行われた

にドーンと大きな塀で囲まれたこの豪華ホテルだ。

大きなプールはもちろんのことエアコンの効いた大きなロビー、ピッカピカの水洗トイレなど、ついさつきまで走っていたサハラ砂漠でのそれとの落差に戸惑いを隠せなかった。

午後七時過ぎから始まったパーティーでは肉、魚そしてワイン、ビールとつい先程まで 砂漠で自給自足の生活をしていたそれとは大違いでテーブルに出てくるものはすぐに皆の胃袋に吸い込まれて行った。

夜も深まり大半の人達がパーティー会場から引き上げていく。

そんな中私を含む二十人ほどが生バンドをバックに踊り出す。

踊りは苦手なオイラだがサハラ砂漠を走り終えたモロッコの夜、アルコールを片手に踊らずにはいられなかった。

最後にはパンツ一枚になりパーティー会場横にあるプールに飛び込む始末。
もう誰も私を止められない。部屋に帰ったのは午前一時を大きく回っていた。

四月十日(月)

午前六時三十分起床 三人部屋で眠りについたオレはさわやかな朝を迎えた。
目覚めもスッキリ。しかし寝る時は確かオレの隣のベッドで寝ていたはずの黒沢さんの姿

見えない。(私の感は的中した) そうこうしていると枕を手に黒沢さんが素知らぬ顔で部屋に帰ってきたのだ。

後日、人から聞いた話だが私のイビキに耐えきれず枕を抱えて他の日本人の部屋に行ったらしい。

しかしその部屋には鍵が掛かっており更に皆疲れて熟睡していたため黒沢さんのドアのノック音も気付かなかったとのこと。仕方なしに黒沢さんはロビーのソファで朝を待たらしい。

「マラソンゴール後ホテルでゆっくり寝れるはずだったのに・・・」とても申し訳ない事をしてしまった。

ここザゴラを九時三十分に出発、三時間程バスに揺られてワルザザートに着く。

ワルザザートからは夕方のフライトでパリに直行そして解散となる。

がオイラといえばここでサハラマラソン関係者とは別れいよいよ待ちに待ったモロッコの一人旅の始まりである。

「今日はここワルザザートでも泊まろうか・・・」。さっそく銀行を探して換金手続きをする。

ここで「地球の歩き方モロッコ編」の登場である。

しかし「この本はあまり当てにならない・・・」などと聞くことがあるがそれは情報の行き届いている旅先での話だろう。

少なくともここモロッコにおいてはこの本はパスポートの次に大切なものであった。

なぜならこの後のモロッコでは誰一人として日本人に会うことはなかったくらいだったのだから。

今夜は民間バスターミナルより西へ 100m 程行ったところにある ROYALHOTEL EL に泊まることにした。

一階はレスロランになっていてホテルの部屋は二階にある。そのホテルの入り口は西側を少し入ったところにあり少しわかりにくい。

薄暗いフロントには五十歳を過ぎたころの黒人の男がいた。

一泊 51DH(約四百六十円)との答えに私はとりあえず「ガリー(高い)」と値切る。

というのも公共施設などは別として特に売り物などには正式な価格などないのがこちらの常識である。

がそのカウンター越しの男は値段を下げる(交渉する)気配がないので仕方なしに言われたままのお金を払う。

壁飾りにでもできそうなくらいに大きな鍵を受け取り部屋に入る。

四畳半ぐらいのその部屋にはベッドの他に小さな机と洗面所があるだけのさっぱりした小

部屋だ。

トイレ、シャワーは共同で私の部屋のすぐ近くにある。夕方観光がてらに街を散歩する。九十二年に行ったタンザニアの時もそうであったが現地の人のんびりとした暮らしには不思議さを感じてしまう。仕事をしているのか、皆申し合わせたように道端に腰をおろし車そして人々の行き交う様をじっとみている。

荷物を引いているロバまでが更にゆっくりゆっくりと歩いているようだ。

お土産を買うのに手当たり次第店に入る。「地球の歩き方」にも書いてあったが品物（特に土産品）には値段の表示はなく交渉によりその値段が決まるということである。

面倒くさがりの私にとってはとても苦手な事となるがそれも異国の地と言いつい聞かせひとつひとつ値段を聞きその度に「高い」と値切るのである。

というのも観光客となれば何倍もの値段をつけてくる。まして「ジャポン」ともなればなおさらだ。

オレが道行くだけでいろいろと声をかけられその有り様はまるで「日本人からはお金が取れる」と言わんばかりだ。

そうなるとなおさら言われたままの値段ではばからしくなってくる。

四月十一日(火)

オレが泊まったホテルのすぐ前にはスーパーマーケットがありそこにはなんとビールを始めとするアルコールがたくさん売られていた。

その時はなにも思わず缶ビールを一本だけ買ったがその後マラケシュ、カサブランカと旅したがアルコールはもちろんのことスーパーマーケットすら全く見当たらなかった。

考えてみればここモロッコはサウジアラビアから遠く離れているとはいえアラブの国イスラム社会の国であるのでアルコールがたくさん出回っているのもおかしいものか。

そうなるとなぜあそこだけにアルコールが売られていたのか今もって不思議でならない。参考までに缶ビール一本 1DH(約九九円)であった。

朝八時過ぎに銀行で換金する。五百フランのT/Cで約 900DH ほどの現金が手元に来た。お土産を買い、郵便局で日本にハガキを出す。(一枚 4.4DH 約四十円)今日はマラケシュで宿泊予定のためバスで移動だ。

ここには CTM と民営のローカルバスとがありそれはちやうど日本でいう JR と私鉄みたいなもの。

値段は高いが少しきれいな CTM に乗る事にする。見るからにこっちの方が故障しにくく安全そうである。

オレの泊まったホテルからモハメッド五世通りを東に五分程歩くとCTMのバスターミナルがある。

でさっそく切符を買う。ここワルザザートからマラケッシュまでの乗車賃41DH(約三百七十円)そして更に荷物代として4DHを支払う。十一時三十分発のバスは定刻より一時間程遅れて出発する。まあオレも気ままな旅、ましてそれがアフリカとなれば1〜2時間くらいの遅れを気にしているようでも仕方あるまい。ようやく走り出したバスは一時間もしないうちにエンジン音を轟かせ山道をぐんぐんと上がりだした。

そうマラケッシュに行くには大アトラス山脈を越えなければならないのである。

4,000m級のトゥブカル山を左手に見ながら



マラケッシュからは電車で移動！気分は「世界の車窓から」

のバスの長旅である。

アトラス山脈の峠を越え麓近くまで行くとドライブインらしき食べ物屋が十軒程道沿いに位置するところで休憩となる。

ここでもよそ者に対しての客引きがしつこい。「ジャポン、ジャポン、コンニチワ！」と私を見るなり片言日本語で近づいて来る。

日本の観光客が多いのか（しかしワルザザートでサハラマラソン参加者と別れた後はこの国で日本人には一度も合わなかったが）それとも日本人はたくさんお金を払うのか？

しつこい客引きのない店を選び店内に入る。30DHから20DHにねぎった昼飯のメニューはポテト、ニンジン、肉などをケチャップで味付けした煮物はどこか日本食にも似ているところがありとてもおいしかった。

四時間のバス旅の後にマラケッシュで待っていたものはまたしてもしつこ過ぎる程の客引きであった。

「トウキョウデスカ、オオサカデスカ？」「ワタシ、ニホンノトモダチマス。イイ、ホテル、アリマス」バスから降りたと同時にこの有り様だ。

それにしても日本語が上手である。いや関心している場合ではない。今日泊まるホテルを探さなければならないのである。

ドウカラ門をくぐり少し北に行ったところにあるホテル SOUTHA (何と発音するのか分からない) に泊まることにする。

バスターミナルから歩いて五分のところだ。宿泊費はシャワー、トイレが共同で 80DH (約七百二十円) とのこと。ちよつと高いか? あまり値切れず 60DH (約五百四十円) で泊まることに決める。

アラブで一番にぎやかと言われる町マラケツシュに来たからにはこの町の中心ジャマ・エル・フナ広場に行かない理由はない。

時間的にも夕飯に丁度だ。さつそく町の地図を片手にジャマ・エル・フナ広場に向かう。1km 程の距離のはずだが道がともわかりにくく迷いながらやつとのことだとどり着く。「ジャマ・エル・フナ」とはアラビア語で「死人の集まり」と言う意味らしくかつてはこの広場は公開処刑所だったらしい。

そんな過去を感じさせないくらい大道芸人がそれぞれに自慢の芸を披露していてとてみにぎやかだ。

その大道芸人を広場の隅に追いやるように百軒近い食べ物の屋台が所狭しと並んでいるのもジャマ・エル・フナ広場の特徴のようでもある。

店先に並べてある好きな果物を目の前でジュースにして飲ませてくれる屋台ともうひとつは魚、野菜等をフライにしている屋台だ。

ちよつと残念なのは宗教上の理由でアルコールがないことである。

私はビールが飲みたくて何軒か聞いて回ったがここにあるのはコーラとジュースだけだった。

いい大人が屋台の椅子に腰を下ろし「コーラ片手に魚のフライをつまむ」なんてちよつと味気ない気もしたがこれもアラブの国モロッコともなれば仕方ないことか。

四月十二日 (水)

午前七時起床 朝一番荷物をまとめてジャマ・エル・フナ広場へ向かう。昨夜行ったときその近くに確か銀行があったはずだ。銀行には迷わず行けたものの、銀行の中に入ろうとした時、入り口で警備をしているらしい警官に呼び止められる。

「その大きなバッグを持って銀行に入るのはできない!」

なぜバッグを持つて入ることができないのか・・・
オイラが銀行強盗でもするというのか。

しかしこの大きなバックをここに置いて中に入るといふことは「オイラの大事な荷物を盗んでくれ」と言っているようなもの・・・

仕方なしにその警察官に荷物を見てもらうことにした。しかし警察官といっても安心はできない。

私は銀行で両替をする十数分の間、警察官に預けた荷物をチェックしに銀行を何度出たり入ったりしたことか。

この広場のカフェで朝食をとる。パン2個をミントティーとたっぷりシュガーの入ったコーヒーを一杯づつ飲む。全部で11DH(約九九円)だ。

今日はカサブランカに宿泊予定である。考えてみたら明日はカサブランカからパリへ移動と忙しい気もするが何ひとつ束縛される事のない気ままな旅はとても楽しいものでもある。



哀愁のカサブランカ(笑)

今日のカサブランカまでの移動は電車を使うことにする。なんかアプリカで電車に乗れるなんて考えただけでもワクワクしてくる。

マラケッシュからカサブランカ(地元では「カサ」というようだ)まで約二百七十kmの電車賃は、70.5DH(約六百三十円)。

この切符は駅の機械で打ち出したものなので正規の金額だろう。

十二時三十二分出発。こちらの方もバスと違い定刻通りだ。

しかし困ったことにプラットフォームには駅名が日本とは違い一個所改札口に小さく書いてあるだけなので車窓からは今そして次の駅どこなのか私にはさっぱり検討がつかない。車内放送もないありさまだ。

車掌に私が下車するカサブランカボヤジャー駅に何時頃に着くか尋ねた後、その間少し寝ることにする。

ふと目を覚まし外の景色に目をやると、どこまでも続く大平原の中に土色をした平屋建ての家がポツンポツンと寂しげに顔を覗かせている。

そして車窓の景色がだんだんと活気づく町並みへと変化して行く。私の下りる駅はもうすぐだ。

スペイン語で白い家を意味するカサブランカの町はすっかり西洋化してしまったのか、つ

い三日までサハラ砂漠でキャンプ生活をしてきたオイラにとっては環境の違いに驚くばかりであった。

駅からタクシーでホテルに向かう。
カサブランカの中心モハメッド広場に面しているHOTEL・EXCELSIORにチェックイン。
これも「地球の歩き方」のお世話になる。

フロントで値段交渉をするが値切れることはできず結局169DH(約千五百二十円)を払う。
でも朝食付きなので良しとしよう。部屋に荷物を置いてさっそくカサの町を散歩する。「メデイナ」と呼ばれるアラブの町の散歩である。

この「メデイナ」とは七世紀にアラブ人が侵入してから造られた古い町並みとのこと。
人がやっとすれ違えるほどの狭い路地の両側にはいろいろな店がところ狭しと並んでいる。

野菜、肉などの食料品から衣類、革製品それに金物類など生活に必要なものが揃ってしまふほど、ありとあらゆる店が活気に満ち溢れていてとても活気づいていた。

その光景は何百年前もの昔がそのまま現在に残っているようでここでメデイナを歩いているといつの間にかタイムスリップしたような不思議な気持ちになってくる。

メデイナのはずれに「魚のフライ」の店が何件か並んでいる。

五軒程中に入るとマーチと名乗る店の主人に呼び止められる。英語で気軽に話しかける彼は今までの日本人を「カモにする？」それとは少し違うようだ。

ここメデイナそのものが現地人を相手に商売をしているためか特別に私にものを売りつけるようなことはしないようだ。

そんな彼らといる話をしていくうちにマーチはなんと店先で私に魚の揚げ方を教えてくれた。

揚げた魚を店先に並べると今度は客の呼び込み方をも教えるありさま。

オイラは「ララララ・・・！」と彼の言う通りにお客さんに向かって呼び込みの真似をする。

と隣近所の店そしてその回りからドーっと笑いの渦が巻き起こる。

ふと気が付くといつの間にかすっかりこの場に溶け込んでしまっていた。

ちよっとオーバーな表現になるかも知れないが「人類皆兄弟」っていう言葉があるが、オレは彼らとほんの一瞬ではあったが同じ空間を共有したモロッコの夜だった。

四月十三日(木)

午前六時起床 ホテルで朝食をとりすぐに散歩に出かける。

レストランでコーヒーを飲む(5DH/四十五円)。昨日も飲んだがどこも5DHと値段は同じようだ。オレはもともとコーヒーが苦手だがこのコーヒーはミルクと砂糖を入れるととてもおいしく飲める。

コーヒーを飲みながら植村直己の「青春を山に賭けて」をウエストバッグから取り出す。わざわざこんなモロッコまで来てと思うだろうがこの本はとても気に入っていて過去に幾度も読んではいるので、「サハラマラソンゴール後に読もう！」と日本を出る時から決めていたものである。

しかし読書が苦手なオレは時間がかかってしまい結局のところ帰国途上の機内でもそれ



サハラの余韻より植村直己の「青春を山に賭けて」に没頭

を読み続けていた。そのため関西空港に着いた時はサハラマラソン、モロッコの余韻などはどこにもなく私の頭の中は「植村直己の生きざま」でいっぱいであった。

荷物をまとめカサブランカのホテルを後にする。CTM バスターミナルへ向かう。歩いて十五分程でバスターミナルに着いたが驚いたことに空港行きのバスは現在運行していないとのこと。

ならば電車という方法もあるが駅は遠く今からでは時間が足りない。タクシーを使うにもモロッコのお金はそんなに持ってない。

というのも出国時にちょうどお金を使いきるように調節していたためバス代ほどのお金にか私のポケットには入っていないからなのである。

しかしどうやら私以外にもこのバスの運行中止で困っている人々がいるようだ。そうこうしているとすぐ近くのタクシー乗り場では「相乗りでいいのなら持つてただけのお金を出せ！」と乗客に呼びかけている？ようだ。

さっそく相乗りタクシーに乗車し、事無きを終える。

午後三時オレの乗った飛行機はたっくさんの想い出を乗せアフリカモロッコの地を離陸した。窓から見下ろすと小さくなったモロッコの町並みがもうなつかしく感じてくるのだった。

三年前(タンザニア)の時もそうであったが現地を立つ飛行機の中というのとはとてもむなしい気持ちになるものである。

三時間のフライトと二時間の時差とを合わせてフランス時間午後八時にオルリー空港に到着する。

ロビーにはこのサハラマラソンで友達になつたばかりのジョセフが迎えに来てくれていた。

オレがフライトの都合でパリに一泊して日本に帰ることを知った彼はならば「家に泊まりに來い」と誘つてくれたのだ。

その彼の家はオリルー空港から車で約三十分ぐらい走ったセーヌ川のほとりにあった。

芝の手入れの行き届いている庭に出てみる



と大きな公園の向こうにセーヌ川がゆつくりと流れている。

なんて素敵なところに住んでいるのか・・・。

とても静かで落ち着いた町並みはつい先程までのモロッコのそれとはまた違った世界でもあった。

振り返ってみればこの二週間はあつという間に過ぎてしまった気がする。

サハラ砂漠での生活そしてメデイナの古い町並みに生きる人々など・・・

短い時間ではあつたがオレなりにいろいろと感じるところは多かつた。

全力で駆け抜けることができたサハラマラソンのゴール。

体力(速く走る走力ではない)にも自信はあつたし、何よりもこの大自然のサハラ砂漠に一番溶け込んでいるという気持ちが強かつたからであるう。

よく人は「成功」とか「失敗」とかいう言葉を口にすることがある。

確かにそういう言葉は、はっきりしていて物事を表現するにはもってこいのようだ。

しかしどんな事に関してもそんな二文字だけで決めつけられるものではないと思う。

あえて使うなら「行動する事、一歩前に進む事」そのものを「成功」という言葉に結びつ

けてもいいのではなからうか。

頭で考えることは誰にでもできる。しかし現実には結果そして自分を取り巻く圧力みたいなものに押しつぶされて行動に移せず終わってしまうことが多い様な気がする。飯に一步二歩しか進めず途中でつまずいてしまったとしても本人にしてみればとても価値のある有意義なことになるだろうし、まして「失敗」などという言葉はあてはまらないはずだ。

生意気なことを言うようだが私は日本をいやあの荒れ果てた神戸を旅立つ時、もうすでに一步踏み出していたような気がする。またいつの日か訪れたいサハラ砂漠。そしてその地平線のざーっと先にある何かに向かって歩いていきたい

写真・文 K.KATO

九五年 モロッコ物語



一週間の食料 (実際にはここから減らした)



衣料とギヤなど